

令和3年度

第5回大垣市社会教育委員の会 議事録

日時	令和3年12月21日(火) 10:00~11:30
場所	大垣市役所 8階大会議室
次第	1 開会のことば 2 教育長あいさつ 3 議事 (1) 青少年実践発表 「地域における絆づくり・人づくり」～サタデー宇留生の取組を通して～ (2) 意見交流 テーマ「子どもたちを育む地域の活動づくり」 4 閉会のことば
出席者	【大垣市社会教育委員9名、社会教育推進員20名、発表者2名、事務局9名、計40名】 ・大垣市社会教育委員 佐野 篤、益川 浩一、神谷 利行、竹中 昌子、稲川 明子、平野 宏司、 安田 義明、林 亜有美、河瀬 実浩 ・社会教育推進員 杉山 正明、大場 登喜子、北島 義市郎、名和 茂樹、説田 泰朗 辻村 誠一、三輪 徳子、内藤 公雄、山本 学、早野 眞吾、小川 亨 古川 政子、竹中 繁、高山 成雄、田村 喜代子、谷口 隆康、三輪 賢司 渡邊 達也、近藤 茂、臼井 博彦 ・実践発表者 櫻井 壽和(宇留生校区青少年育成推進会会長)、三代 広子(サタデー宇留生指導者) ・教育委員会 山本 譲(教育長)、寺嶋 太志(事務局長) ・事務局 堀 恭寿(社会教育スポーツ課長)、鎌宮 好孝(社会教育スポーツ課参事) 窪田 美保(社会教育スポーツ課主幹)、田島 善之(社会教育スポーツ課主幹) 竹内 陽子(社会教育スポーツ課主査)、細野 未有(社会教育スポーツ課主事) 坪井 秀憲(社会教育指導員)
傍聴者	【1名】
事務局	開会のことば
教育長	教育長あいさつ

<p>事務局</p>	<ul style="list-style-type: none"> <p>・コロナ禍ということで今年も画面越しの会議、書類だけの会議が多くあった。私自身もオンラインでの会議を何度か経験させていただいているが、そのたびに十分なコミュニケーションができずに対面に勝るものはないと感じている。今日こうして社会教育委員、社会教育推進員の皆様と一緒に会議ができることを喜んでいる。</p> <p>一方で、子どもたちは、毎日検温をしたり、マスクをしたり、短期間の修学旅行、学年別の運動会と感染防止の学校生活を送っている。そうした中、とりわけ黙って給食を食べる黙食とかマスク越しの話し合いをしている様子を見ているときっとストレスのある学校生活になっている。一方で友達と会って学校生活ができる喜びも感じている。これからもコロナ禍が続いていくが、できるだけ通常に近い形で学校生活を送れるようにしていく。</p> <p>本日は、サタデー宇留生の取組について、ご発表をいただき、「子どもたちを育む地域の活動づくり」というテーマでご意見をいただく。コロナ禍で子どもたちが集まって活動することは難しくなっているが、できるだけ無理のない中で、こうした活動ができればと願っている。</p> <p>・土曜まるごと学園事業、地域社会教育推進事業の進捗状況について説明する。地域ぐるみで、土曜日の子どもたちの居場所づくりを提供する事業としてスタートした「大垣まるごと土曜学園事業」がある。大垣まるごと土曜学園事業とは、学校休業日の地域活動として開催する講座及び放課後の読書活動に対して、補助金を交付し、地域における大人と子どもの交流を図るとともに、地域の指導者の活用を推進する事業である。事業内容としては、地域子ども活動支援事業補助金と放課後週末読書等活動事業補助金がある。活動実績例は、資料のとおりである。</p> <p>本日は、地域子ども活動支援事業のなかのサタデー宇留生の実践を聞く。地域子ども活動支援事業では、子どもたちが学年の異なる子どもたちや地域の人々との交流を通じ、自主性、社会性、創造力等をはぐくむ講座、講演会等を実施してもらっている。市としては、地域の絆づくりといった視点からも今後も引き続き継続し、充実していきたいと考えている。地域の絆づくりは、子供と大人の交流だけでなく、大人同士の交流も大切となる。コロナ禍において、令和2年度は4団体にとどまった。</p> <p>また、資料の最後のページには現段階での地域社会教育推進事業の進捗状況を載せさせていただいた。コロナ禍においてなかなか活動が実施できない</p>
------------	--

<p>議長</p>	<p>状況が続いている。少しずつではあるが、活動を再開している地区がでてきている。</p> <ul style="list-style-type: none"> • それではこれより議事に入る。 <p>議事進行は、大垣市社会教育委員佐野議長にお願いする。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 会の開催に先立ちまして、この会を大垣市情報公開条例の規定に基づき、非公開とする情報がないため公開とする。 (坪井 … ドアを開け傍聴人を入れる。) • それでは、議題1「子どもたちを育む地域の活動づくり」について、意見交流をする。本日は、大垣市社会教育委員の竹中昌子委員、櫻井壽和宇留生校区青少年育成推進会会長、三代広子サタデー宇留生指導者より、「サタデー宇留生」の取組について、実践発表していただき、その後、質疑応答、意見交流を行う。
<p>発表者</p>	<ul style="list-style-type: none"> • これより、「地域における絆づくり・人づくり～サタデー宇留生の取組について～」発表させていただく。 • 旧大垣市における公民館活動は、長らく「南部」「北部」「赤坂」の3つの公民館が中心となり、推進してきた。 一方、地区センターは、昭和60年度より各校区に順次設置され、平成22年には、すべての校区に、18の地区センターと、類似施設として西部研修センターが整備され、旧大垣市の3つの公民館は廃止、転用された。また、旧上石津地区には、「牧田」「一之瀬」「多良」「時」の4つの公民館が、旧墨俣地区には「墨俣さくら会館」が、合併前から校区ごとに設置されており、現在も継続して設置・運営されている。したがって、現在大垣市は、ご覧のような4つの公民館、19の地区センター、1つの会館の計24の施設により、地域に根差し、地域の求めに応じたきめ細かな社会教育活動を市内全域で展開している。平成22年3月に「大垣市教育振興基本方針」を策定し10年経つことから、これからの10年を見据えた「大垣市第2次教育振興基本計画」を令和元年度に策定した。「大垣市第2次教育振興基本計画」の基本理念は、「みんなが学び交わり成長する文教のまち大垣～次代を拓く「人づくり～」である。 この基本理念のもと、ご覧のような4つの基本目標をたて、また、次のような10の基本施策をたてた。本日はその中から、特に、基本目標3基本施

策(1)「歴史・文化に触れる社会教育の推進」について、説明する。

現在、少子化、核家族化等の社会構造の変化により、子どもが学校や家族以外の大人とつながる機会が減少している。また、大人の社会においても、地域とのつながりが希薄化している。地域の歴史や文化に触れる地域行事等への参加を促進することにより、地域社会とのかかわりを深めて、これからの時代に必要な生きる力や地域への愛着や誇りをもった人づくりを目指している。

次に、基本目標3 基本施策(1)「歴史・文化に触れる社会教育の推進」における「大垣まるごと土曜学園事業」について、説明する。

大垣市は、平成14年4月から学校週5日制の実施に伴い、地区センターなどを拠点に、地域ぐるみで土曜日の子どもの居場所を提供する事業として「大垣まるごと土曜学園事業」を実施している。この事業の立ち上げにあたり、子ども達に普段体験できないような経験をさせたい、楽しんで参加してもらいたいという強い願いのもと、各地域の方々が何度も話し合いを重ね、企画・計画を行った。前例や経験がない中スタートしたが、「少しでもよいものにしたい」と試行錯誤しながら活動を進めている。

本日は、「大垣まるごと土曜学園事業」の実践例として、宇留生地区の活動「サタデー宇留生」を紹介していく。宇留生地区では、平成15年に地域の方々の支援を受けてサタデー宇留生運営委員会が発足し、各教室が開設した。科学工作教室、俳句教室、英会話教室に加え、お花教室、お茶教室、踊りアラカルト教室など多彩な内容の教室がある。講師の多くは、地域の住民が担っている。教室では、「個性を伸ばす」「集うことの楽しさを学習する」「ひとつのことを追求する」など具体的な目標をもって活動している。

また、お茶教室では、子ども全員に抹茶茶碗を準備したり、踊りアラカルト教室では、衣装をそろえたりと各教室で工夫を凝らしている。現在では、地域の「みんなで夏祭り」や「地区センター祭り」にお茶、お花、踊りアラカルト教室の子どもたちが参加することが恒例となった。そんな「サタデー宇留生」は、今年で18年目を迎えている。

本実践発表では、サタデー宇留生の教室の中で私が指導を行っている踊りアラカルト教室について話をする。踊りアラカルト教室では、私と4~5名のスタッフとともに教室を進めている。スタッフは全員、地域の人材である。指導者・スタッフと子ども達の間には、教室で過ごす時間を通して信頼関係ができている。そして、互いに学びあって絆を深めている。教室では、親も

子どもも地域の方も「共に感動」をモットーに活動を進めている。
教室において、特に大切にしていることは、地域の子どもリーダー育成である。6年生になると、リーダーとして、低学年、中学年、高学年の子どもたちのまとめ役になる。リーダーを中心とした縦割り活動を、特に重要視している。子どもたちは、こうした活動から社会性を身に付けている。指導者・スタッフは、子どもたちと共に、真剣に楽しく、汗を流しながら一生懸命練習をしている。いろいろな場で踊りの成果を発表し、見に来た方に喜んでもらっている。走り回っていた1年生の子が、時を経て6年生になりリーダーとして、下級生の子の面倒を見たり、踊りを教えたりしている姿を見ていると、子どもの成長のすばらしさに涙があふれてくる。

参加した子どもの感想である。「ぼくは、6年間サタデー宇留生を続けることができた。その理由は、とても楽しかったから。そしていろんな学年の人と仲良くなれたことがうれしかったから。一番楽しかったのは、よさこいソーランを大勢の前で踊ったこと。今では、リーダーとしてかけ声をかけたり、先頭に立って教えたりしている。6年間サタデー宇留生を続けてとても良かった。」

取組の成果として、「子どもたちは、地域で伸びている」ことを実感している。「人とのふれあい体験」や地域をよくするための「大人たちの協働活動」は、子どもたちの将来に大きな勇気と力を発揮するものと思う。このように活動を通して自主性や社会性が育まれる風土が宇留生地区には根付いており、代々そのバトンが引き継がれ青少年健全育成の大きな役割を果たしている。教室を通して子どもも大人も世代を超えた絆が生まれ、その絆も年を追うごとに強くなり、活気あふれる地域となっている。

ここで成長した子ども達は、大人になっても地域に愛着を持ち続ける。それをきっかけに、誰もが長く住みたい地域となっていくと信じている。

「宇留生ってどんなところ？」と聞かれたら私は『「宇留生は、いいところ」と自分たちで言える地域』と答える。私は、宇留生地区に住む人が、生きがいをもって快適に、ここで暮らし続けたいと思った時に、それが実現できる地域をつくりたいと思っている。皆で支え合い、助け合えるつながりや絆をつくるため、これからもサタデー宇留生の取組を充実させていく。

これで、発表を終わる。

議長

・本日は、社会教育委員、社会教育推進員の皆様にご出席いただいている。そ

<p>社会教育委員</p>	<p>それぞれの地域、立場で「子どもたちを育む地域の活動づくり」にご尽力いただいている方ばかりである。皆さま方の実戦を踏まえながら、多くの方々からご意見をいただきたい。</p> <p>また、地域づくりの中で子どもたちを育てていくことがとても重要であると先ほどの発表でご提言いただいた。子どもたちの居場所づくりが地域を切り拓いていく可能性についてもご提言いただいた。運営組織面、学校との連携や活動面など様々な角度からご意見をいただきたい。</p> <p>・サタデー宇留生の取組を聞いて、子どもたちが学校教育や家庭教育では味わえないような喜びの場を設けていることが素晴らしいと思った。みんなで取り組むことができること、6年間の子どもたちの感想からもそう感じた。地域の子供たちが集まると保護者からの要望や課題が出てくることと思うが、そうした声をどう吸い上げ生かしているのか教えていただきたい。</p>
<p>発表者</p>	<p>・サタデー宇留生の取組も18年目を迎え、マンネリ化が出てくる時期である。組織的な面で、子どもたちの面倒を見ているのは、地域の人である。地域に意見が上がりやすいよう工夫している。30代、40代の保護者の意見を聞くために子ども会、育成会のお手伝いをしていただいている。その方々からご意見をいただいている。</p>
<p>社会教育推進委員</p>	<p>・各町内どこでも防災関係、障がいのある方、高齢者への食事サービスその他、地域として、町内としてやらなければならないことがたくさんある。自治会長を中心に各町内が様々な問題に対してどういう実践をするか、それが一番大事である。町内が一番力を付けなければならない。ある組織がある企画をすることよりも、町内をベースとした地域の絆を深めることが一番大事である。中川地区は、人口が1万3000千人いる。25年以上前に推進員の方が青少年育成関係団体交流会をつくった。全国的に学校荒廃が進む中、地域として星和中を応援することができないか考え、自治会長、民生児童委員、福祉推進員、子ども会関係者、社会教育推進員、交通安全関係者、見守りEye関係者、小中学校関係者、PTA関係者、子どもに関わる人全てが一同に会して、青少年育成を話し合うという場をつくった。6月の第1週の土曜日にふれあいセンター等で実施している。</p> <p>昨年は、コロナの関係で中止であった。各町内でテーマを決めて話し合う。</p>

	<p>例えば、「地域行事で小中学生をいかに生かすか」といったテーマを話し合う。事前に自分の町内の実践を発表してもらおうよう頼み、発表してもらおう。町内にいかに力を付けてもらうかということをお願いしている。話し合いが飛ばないように「ラジオ体操を見直そう」「児童生徒の通学路の安全」等とテーマを絞った。</p> <p>確実に変わってきたのは、各町内が、意図的に実践しているということである。例えば、春祭り等では、小中学生を生かしたり、日常に行ういきいきサロンでは、子どもの休みの日に小学校の高学年、中学生を巻きこみお手伝いをしてもらったりしている。各町内が工夫して実践している。それが一番地についた青少年育成、高齢者への援助になっていくと思う。そうしないと、どこかの団体がいくら企画しても地域には生きてこない。あくまでも青少年育成や、高齢者が喜んで生活するためには、地域のリーダーがお互いに場を意図的に仕組み、人間関係を深めていくといった地に着いた活動が、これからとても大切となる。2年間コロナ禍できていないが、来年は実践出来たらと考えている。</p>
議長	<ul style="list-style-type: none"> ・意見交流の中で、自治会の連携など、子どもを育てる願いをはっきりさせて共有化していくことや、各団体と連動していくことが大切という意見があったが宇留生はどうか。
発表者	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちは、小さな組織である。いつも子どもたちと向き合っている。ただ、この時代において、子どもたちは、いろんな感受性をもっている。おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さんの考え方を工夫しながら、子どもたちに伝え、付き合っていく。私たちは、子どもたちに「地域に帰ってきてほしい」「ふるさとを愛してほしい」という気持ちで関わっている。今、ドーナツ化現象等、様々な問題を抱えながら苦勞している。その中の一部分として感受性を高めるという活動をしている。
社会教育推進委員	<ul style="list-style-type: none"> ・サタデー宇留生の取組が18年間も継続されている大きな要因は、活動をリードする人材にあると感じた。指導者を次から次へと発掘されてコーディネートされている皆様なのであろうと感じた。私たちはそこに課題を持っている。地域の人材をどうやって生かしていくのか大きな課題と感じている。また、子どもたちの活動がただの活動に終わらずに、発表の場があり、満足感、

<p>社会教育推進委員</p> <p>議長</p> <p>発表者</p>	<p>充実感がある。子どもたちにやってよかったと思わせているところが素晴らしいと感じた。長く居続けたい地域、SDGs でいうと 11 番目の項目「住み続けられる場所づくり」につながるものだと考える。世界的に SDGs は様々なところで利用され、学校でも総合的な学習の時間で行われている。学校の SDGs の関係で連携できればと思っている。18 年間の実践の中で課題があれば教えていただきたい。</p> <p>・実践が豊富である。地域でのやらなければならない課題というのは、必然的に災害対策など、高齢者に行くが、子どもに目を向けたときに地域のニーズ合った課題というものを活動にいれるべきである。自由選択的な活動になってもいい。やる内容、活動も枠組みを作ると子どもたちは来にくい。私の地域では、やりたい内容が先にあり、それに合わせた活動にしている。ニーズがでてくるような積極的な活動がなかなかできない。現実には、土曜日など少年団があつたりしてとても忙しい子どもたちである。宇留生地区は、学校との連携をどのようにしているか。地域の人材をいかす指導者、指導者の力量と内容とニーズの兼ね合いをどうしているか教えていただきたい。</p> <p>・学校との連携、活動を支えている人材育成についてどのようにしているか。</p> <p>・4 月は、子どもたちの募集をかける。踊り、俳句等、選択肢は広くしてある。子どもたちが興味のあるところに入ってもらうために地区センターの館長から募集要項を配っていただく。各教室に集まってくる。</p> <p>私は、踊り教室をやっている。自分たちが踊りたい踊りを子どもたちに押し付けるのではなく、子どもたちの踊りたい踊りを取り入れて、子どもに教えている。私は、教室を立ち上げるために何かできないか考えたときに、踊りができないかと考え、青年の家によさこいソーランをスタッフとともに習いにいった。スタートがそこにある。先生でもない指導者でもない私たちが、16 年間子どもたちと一緒に踊って自然と踊りがうまくなっていった気がする。人材発掘は難しい。いろんな方を巻き込み協力体制をとって子どもたちが育つように、愛情を地域の人から与えられるかが大切である。子ども自身が愛されているという感覚をもって生活してもらいたい。子どもが好きな人ならだれでもできると思う。</p>
--------------------------------------	---

<p>社会教育推進委員</p>	<p>・春の運動会がある。西部中の生徒がリーダーとなって活動してくれている。リーダーの育成を大切にしている実践が、地域に生きている。「なすことによって学ぶ」という言葉があるが、活動するうえでリーダーというのは必要だと思う。地域の人が、リーダー育成に一生懸命取り組んでいる。</p>
<p>社会教育推進員</p>	<p>・平成24年から学校支援ボランティアを北小・中で取り組んでいる。毎年20回～30回活動しているが、今年は10回くらい学校の校庭の整備等20人でやっている。学校支援ボランティアに対して予算が組まれていない。器具のことであるが、草刈鎌とか学校の備品で傷んだ時は、市の方にいただき、借りて行っていたがこの新庁舎になった時に在庫がなくなった。このようなものはどのようにして手に入れたらよいかと聞いたところ、当時の担当から学校支援ボランティアの予算は学校に渡してあるので学校で購入してくださいと言われた。校長に確認をしたら、校長は聞いていない。運営補助金の2万円から道具を買わせてもらった。</p> <p>質問が2つある。3、4年前の社会教育推進協議会で学校支援ボランティアの備品を購入してはいけないかという質問をしたことがある。教育委員会に対して「出してあげたらどうですか」ということをおっしゃっていて、教育委員会も「4つの事業のうち1つの事業の2万円は使ってもよい」という回答だったのに4月になって教育委員会のメンバーも変わり5月の会議では「聞いていない」ということを言われ、結局、自分たちでお金の工面をしながら学校支援ボランティアをしている。支援コーディネーターも会議がコロナ禍で行われていないこともあり、予算のこととか質問とかよくわかっていない状況である。そこで質問は、「4つの事業のうち1つの事業の2万円は学校支援ボランティアに使ってもよいかということ」である。</p> <p>次に、予算の使い方について、お茶は、その都度人数分教育委員会から支給されるが、非常に寒い日にも冷たいお茶がいただける。冷たいお茶を寒い日に飲ませると非常にお年寄りの心臓に悪い。温かいものを飲ませてあげたい。コーヒーを買って温めてあげることはいけないのかと教育委員会に聞いたところ「コーヒーはダメだ」と言われた。結局2万円の運営補助金の中で飲み食いはしてはいけないということで、コーヒーは買えない。お茶菓子は剪定をしてもらった人に出していきたい。お茶菓子はダメかと聞いたら「飲み食いはだめだ」と言われた。休憩の時にお茶、お茶菓子は出せないのか。市の方から何がよくて何がためなのかきちっとしてもらいたい。</p>

議長	<ul style="list-style-type: none"> ・要望として受け止めていくということで事務局で検討していただくということをお願いする。 ・つづいて、学校との連携ということでしょうか。
社会教育委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育の中で、学習の基礎・基本の力、人間としてのバランスがとれた子どもたちを育てるだけでなく、いかに地域の方に育てられているかということが今日の宇留生地区の発表を聞き、分かった。「共に感動する」ということが非常に大切である。意図的に地域の方々がいろんなことを工夫されていて子どもたちが主体性を持って取り組めるか、感動をもって締めくくれるかということについていつも考えていただいている。川並地区でも川並土曜塾をやっている。子どもたちができたときの喜びと一緒に味わっていただくということが、多くの場である。学校教育の場では味わえない地域の方々と一緒に感動する素晴らしい活動であると感じている。 <p>学校と地域の連携は難しいところもあるが、社会教育推進員や青少年育成推進員の方とコミュニケーションをとって、学校の課題を理解していただき、同じ方向を向いていくことを大切にしたい。やりとりをする中で、コロナ禍での課題なども地域の方々とコミュニケーションをとることを心掛けている。</p>
議長	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめると、地域で子どもを育てる願いを様々な団体の方々と共有しながら一緒になって活動していくことが重要である。子どもの活動を魅力的なものにしていくということ、ニーズに合わせて工夫していくことが大切であること、人材をどのように育成していくのかということの難しさがある。
社会教育推進員	<ul style="list-style-type: none"> ・岐阜県の住みやすい街はどこかということで、大垣市は可児市に続いて2番目であった。街並み、歴史・文化、こどもが育ちやすいということが理由にあった。個人や一つの団体がポツと出るのではなく、いろんな団体が一枚岩となって地域づくりをつなげていくことの大切さを感じた。学校との連携も重要である。子どもは地域で伸ばすということ、地域の愛着や誇りを持つ子どもを育成するという大きな目標をもち取り組んでいきたい。
社会教育推進員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校との関係だが、「地域に何を望みますか」と学校長に聞きに行った。「地域で中学生がありがたいと地域から感謝される生徒にできないか」と言われた。それを踏まえて交流会のテーマを考えた。地域に対して、どんな力を貸

	<p>してほしいかという考えを学校は持っている。直接学校へ行って学校長と話すことは大切である。</p>
<p>社会教育委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会に質問である。子どもたちの下校時間に見守り隊がいる。見守り隊の方に下校時刻を知らせたいと学校にお願いをしたら教えられないと言われた。見守りは、お年寄りが行っている。個人情報関係から時間を教えてくれないということであった。いつまでも待っていないといけない状況がある。教育委員会としてそういう指導なのか。どうなのか。
<p>教育長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの見守りについて校区の方にやっていただいて感謝している。先ほどの話で学校と見守り隊の関係であるが、学校に任せてある。今のような話ですので校長先生とご相談させていただきながら、どういう形でやらせていただくのがいいのか検討させていただく。
<p>議長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の中できっと子どもたちは喪失感や生きづらさを感じている。校区の地域の人との関わりながら、子どもと一緒に活動していくということの重要性を改めて感じた。
<p>社会教育委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サタデー宇留生の取組では、「居場所づくり」という言葉が使われたと思うが、縦の関係、横の関係、斜め関係をつくとよいと言われている。縦の関係とは、学校の先生と子どもたち、親と子どもたちの関係、横の関係とは、友達同士の関係、さらに斜め関係として、地域の方と子どもたちの関係など多様な関係性が蓄積されてくると子どもたちの学び、育ちにとって非常によいといわれている。最近、地域の居場所は、第3の居場所と言われている。一番の居場所は、学校であり家庭も居場所である。それ以外の地域の居場所が子どもたちにあると子どもたちの中に人間関係が蓄えられていき、それが子どもたちの力になる。宇留生の取組は、まさに斜め関係をつくり、第3の居場所をつくるような大切な取組であった。 <p>運営面について、多様な関係団体が連携していく上で大切なことは、願いを共有することである。宇留生の実践は、しっかりとできていて「地域への愛着」「子どもたちの豊かな育ち」という願いを共有されているというところが非常に大事だと思う。</p> <p>2つ目は、地域人材の活用の部分が優れている。身近な大人が子どもたち</p>

の育ちに関わってくるといところが優れている。地域人材の発掘の難しさが話題に出ていたが、活動をやっているということを用いたことを使って、いろんな方に知っていただくという機会を増やしていくことが新しい人材を発掘することに繋がる。学校だより、自治会だよりなどいろんな方に知っていただくことでやっている側にとってもやりがいにもなる。「私もこれならできそうだ」というちょっとした思いからスタートしたい。活動を広く知ってもらうことが重要である。こうした活動を積極的に発信していけるとよい。運営面については、多様な団体をつなげる願いの共有と人材の発掘を鑑みていろんな人に知らしめていくそんな機会を持ってほしい。

内容面については、子どもたちが学んだことを、成果を生かす場があることが非常に素晴らしい。やらなければならない必要な課題と子どもたちのやりたい要求の課題の関係づけていくことは難しいが、まずは、子どもたちのやりたい要求の課題を出発点としながら必要な課題を絡めて取組を進めていくのがよい。

3つ目は、継続性という点である。とにかく成果をすぐ求めがちであるが、長いスパンで継続性を考えながら子どもたちを見ていくことが重要である。循環という視点も必要である。学んだことが教える側に回っていくという循環も出てくるとよい。

学校側も地域の方とともに一緒に育てていくということ観点は必要としている。学校も社会とつながりながら進めていくということも言われている。学校側も求めているので、連携を深めながら取組を充実していけたらと思う。

いずれにしてもキーワードは「つながり」となる。地域づくりの一番の基盤は、やはり「つながり」である。「つながり」がどういうことかというところを一緒にやったという協働体験、共有体験、成功体験というものを積み上げる中で信頼が生まれ「つながり」が強くなり、地域の中に「つながり」「絆」が蓄えられていく。そうした「つながり」「絆」が地域の力になる。「つながり」のある地域は、学力が高いとか軽犯罪の率が低いという研究がある。危機やリスクがある時にも重要となる。お互いが期待し、期待される関係を紡ぐことで地域の力は強くなる。「つながりづくり」の場として取組を充実させていってもらえたらと思う。子どもを育む地域の活動は、実は大人も育むものである。大人も学び合うものである。大人も子どもも学び合うような関係性をつくることで地域をよくしていくものである。

事務局	閉会のことば ・以上で、社会教育委員の会を閉じる。
-----	-------------------------------------

上記のとおり、会議の次第を記載し、その相違のないことを証するため、ここに署名する。

議事録署名者 _____